2022年4月3日（日）主日朝礼拝説教

『ふたりの強盗』井上隆晶牧師
イザヤ書53章3〜6節、ルカ23章32〜43節

❶【苦しみと死を連帯する神の子】
「**二人の犯罪人が、イエスと一緒に死刑にされるために、引かれて行った。されこうべと呼ばれるところに来ると、そこで人々はイエスを十字架につけた。犯罪人も一人は右に一人は左に、十字架につけた。**」（32〜33節）イエス様は死刑の中でも最も重い刑であり、奴隷や重罪人に課せられる十字架刑を宣告され、処刑されるためにエルサレムの郊外にあるヘブライ語でゴルゴタ（髑髏という意味）と呼ばれる場所に引かれて行きました。犯罪人は自分がつけられる十字架の横木を自ら背負い、刑場まで歩かされました。刑場にはあらかじめ縦の木が立てられていて、釘で両手首を横木に釘づけられてから、縦の木に組まれ、両足も縦木に釘づけられました。十字架刑はすぐには死ねず、死ぬまで何日も苦しみ、最後は窒息死か、心臓破裂で死ぬそうです。この日ゴルゴタの丘にはイエス様を中心にして３本の十字架が立てられました。
イエス様は、十字架につけられるとすぐ父なる神に祈りました。「**父よ、彼らをお赦し下さい。自分が何をしているのか知らないのです。**」（ルカ23：34）十字架上のイエス様に向かって祭司長たち、十字架についた強盗たち、通りかかる人たち、兵士たちはみな同じような言葉で罵りました。「**他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。**」（同 22：35）「**お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。**」（同27：43）彼らはキリストが多くの奇跡を行い、死者をよみがえらせたことを知っています。この言葉には罵りだけでなく、期待と、それを裏切られた怒りと恨みがまじっています。しかしイエス様は十字架から降りません。人間に罪がある以上、この世では苦しみが無くなることはありません。そこで人々が期待するような奇跡や力という一時的な方法によってではなく、弱さと苦しみを連帯するという方法によって人を救おうとしているのです。

イザヤ書に「**彼の受けた傷によって、私たちはいやされた。…私たちの罪をすべて主は彼に負わせられた。**」（イザヤ 53：6）とあります。これを「**贖い**」といいます。代価を支払ってもらって、罰や拘束から自由にされるという意味です。キリストの十字架の死によって、私たちの罪が赦されるということです。聖書は、犠牲（神の小羊）、身代金（身代わり）、悪魔と死への勝利などさまざまなイメージで、私たち人間を救うメシアの姿を伝えています。しかし、誰に身代金を払ったのでしょう。神ですか？神は人を罪と死の奴隷にしたのではありません。では悪魔ですか？悪いのは悪魔なのに、彼に屈して神の子の命という膨大な値が支払われるのでしょうか。これらのイメージは神の救いの業の一部を表現しているに過ぎません。突きつければ矛盾が出るでしょう。最も分かりやすいのは「**分かち**

合い」という考え方です。ルカ福音書の中にイエスの系図が出てきます。「**イエスはヨセフの子と思われていた。**」から始まって最後は「…**アダム、そして神に至る。**」（ルカ 3：23、38）で終わっています。神とイエス様が人類の系図をはさんでいるのが分かります。人間は罪によって神との関係が切れてしまいました。その切れてしまった鎖の端をキリストがつかみ、神と手を結ぶことによって人類を包み込み、死の連鎖の中に命をもたらしたのです。こうして神の子は人間のすべて（人間性と罪と死）を受け取られ、御自分の中で癒されます。

●私が神学校時代に千里聖愛教会で奉仕をしていた時、ある経験をしました。Aさんは末期の肺癌が体中に転移され、体中に黄疸が出ており、唇は割れ、目は黄色になり、お腹は大きくふくれあがり、見ていてとても痛々しく感じました。彼は若い頃は熱心に教会に行っていましたが、仕事の忙しさの故に教会から離れていました。そんな彼が定年になって教会に帰って来て、私と一緒に熱心に牧師に仕えていたのです。彼はなぜか痛み止めを打とうとしませんでした。彼はベッドの上で、痛みのあまり転がり回っていました。それを見た時、「**彼は私の代わりに、私だけではなく他のクリスチャンの代わりにも苦しんでいるんだ**」と感じました。これは私だけではありません。精神科医の神谷美恵子さんも、ハンセン氏病の患者さんを見た時「**なぜ私たちでなくあなたが？あなたは代わって下さったのだ。**」と詩を書きました。見ていると辛いのですが、何かものすごく天国を、神を感じたのです。そしてなぜか勇気が出てくるのです。

ウクライナで多くの民間人や100名近い子供たちが亡くなりました。腕を失った9歳の子供もいます。国境付近では孤児をさらい、売り飛ばす人もいるといいます。悲惨です。もし私がウクライナ人だったら私が苦しんでいたかもしれないのです。人類は一つの体、一つの家族なのです。人の罪と苦難は分かち合うのです。若い時は、人生は自分のものだと思っていました。自分のために生き、自分が得た物は自分のものだと思っていました。しかし、私たちは生まれる国も時代も選べません。今日まで多くの人に助けられ、引き上げられ、仕事をもらいましたが、自分の力ではありませんでした。自分を超えた大きな力がこの世には働いていて、人を動かしているのです。自分は神様の道具であり、神の救いの計画の歯車の一部なのだと思うようになりました。この罪深い人間家族の中に神の子キリストが入り、この世を、人の罪と苦しみと死を連帯して下さっているのです。この方の所で罪は負わされ、赦しが与えられます。この方の所で死は飲み込まれ、命が始まります。もし神の子が来てくれなかったら、私たちはどうなっていたことでしょう。十字架に栄光がありますように。

❷【あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる】

最初二人の強盗も同様にイエス様を罵っていました。しかし暫くして一方の強盗は考えを改めました。「**お前は神をも恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。我々は自分のやったことの報いをうけているのだから当然だ。しかし、この方は**

何も悪いことをしていない。」（ルカ 23：40～41）彼は自分の罪を認めると共に、イエス様を正しい人だと認めました。そして「**イエスよ、あなたの御国においでになるときには、私を思い出して下さい**」（同 23：42）と祈りました。強盗は天国はキリストの国であり、彼がその国の王であると信じたのです。するとイエス様はこの強盗に「**はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる**」（同 23：43）といわれました。楽園というのは天国（神の国）と同じ意味です。キリストはこの男のわずかな告白を聞いて、天国を約束して下さいました。強盗はどんな良い業も出来ませんでしたが、この一言で天国に入りました。この話は、**人間はどんな時も、キリストに望みをおいて良いのだということを教えています。**私はこの強盗は死の間際に、よくキリストを信じたなあ、と思います。イエス様も十字架にかかっているのです。敵から見たら敗北であり、無力の極みです。それなのに強盗は、キリストは負けたのではなく、自分を天国に入れてくださる勝利者と信じているのです。彼のすごいのは絶望しなかったことです。

●昔の祈祷文にはこう書かれています。「**あなたの十字架は二人の盗賊の間にあって義の秤となりました。一人はそしりの罪の重さによって地獄に落とされ、一人は罪から解かれ、軽く上げられて、キリスト神よ、光栄があなたにありますようにと讃め揚げることを悟りました。**」

イエス様を真ん中にして、右と左の強盗の運命は分かれました。一方はイエス様と共に天国に入り、一方は地獄にとどまりました。

●ではこの地獄に落ちたであろう強盗は救われないのでしょうか？ 4 世紀のシリアの聖イサクは「地獄にいる罪人が、神の愛から切り離されていると想像するのは誤りである。」といっています。聖書に「**陰府に身を横たえようとも、見よ、あなたはそこにいます**」（詩編 139：8）と書いてあります。神の愛はあらゆるところに及び、どんな人をも拒否しません。しかし人間の側では神の愛を拒否するのは自由です。もし誰かが地獄にいるなら、それは神がその人を閉じ込めたからではなく、その人自身がそこにいることを自分で選んだという事なのです。「地獄の扉は内側から錠がおろされている」という言葉を聞いたことがあります。自分で出ようと思えば出れるということなのです。もし誰かが永遠に地獄にいるなら、神は何らかの意味で、その人と共におられるでしょう。ユダがもし地獄に落ちたなら、キリストも彼と共にいるでしょう。彼がキリストの愛を受け入れるなら、彼も神の国へ入るでしょう。神の愛と人間の意志はいつまでも残るでしょう。私たちに分かるのはそこまでです。

レントが始まり４週間がたちました。毎日祈っていますが、何も変わりません。心も行いも清くなりません。教会で祈っている時は、集中しているので悪魔は近づきませんが、教会から一歩外に出れば元に戻ってしまいます。罪を犯せば自分を責めてしまい、神は赦してくれないのではないかと疑ってしまいます。自分を見ると悪魔の罠に陥ります。救いは一方的に神のものです。キリストの愛を信じ

なければなりません。人間を清くできるのは、人間ではなくキリストのみです。十字架の上の強盗は、自分を信じたのではなく、キリストの愛と憐れみを信じたのです。その時、彼は地獄から天国に入り、死の中に命が始まったのです。

「**あなたに望みをおく者はだれも決して恥を受けることはありません。…絶えることなくあなたに望みをおいています。**」（詩編 25：3、5）私は私に対するキリストの大きな愛とその犠牲の力を信じます。その愛は私の肉体の死をもってしても決して終わることはありません。人間の業はすべて過ぎ去るでしょう。でもこの方が私になさったことは永遠に消えず、この方が私を愛した愛は永遠に残るのです。それだけでもう十分なのです。完全な愛の方に愛されることは何という喜びでしょう。完全な命につながることは何という平安でしょう。私たちも強盗と共に祈りましょう。「**イエスよ、あなたの御国においでになるときには、私を思い出して下さい。**」